

41

正倉院文書の「茶」の字は茶か

誌上発表

梅木 春幸

第122回学術大会の一般演題において、私は天平十一年(739年)八月十一日付の正倉院文書『寫經司解』の「茶」について、数量単位が「束」となっていることや他の野菜より「茶」が安いことを根拠にこの「茶」をある種の苦菜と主張する徐静波氏の論と中村羊一郎氏の茶の枝葉を束にして陰干し又は日干しにして作る番茶であるとする主張の対立を紹介し、今後、正倉院文書や先行研究の論文等を精査し、結論を導いていきたいとし、今後の研究課題とすることを約束した。今回はその成果を紹介したい。

781年～806年頃のものと考えられる山城国府跡から当時の茶道具と思われる物が出土していることから781年～806年頃には既に喫茶文化が存在したことになる。そうすると、そこから多めに見積もって67年程しか時代を遡らない天平十一年(739年)に喫茶文化が存在していた可能性は大いにあると考えられる。また、第122回学術大会の一般演題において申し上げたとおり、顧炎武『唐韻正』卷四「茶」の条から798年まではお茶のことを「茶」と表記していた可能性が高い。

問題は中村氏が言うような束にして作る番茶はいつ頃から存在したのかである。中村氏は狂言「煎物売」に登場する洛中の茶売りの売り文句や狂言「今神明」の「天道干し」の茶を客に供したため評判を落とす件を引き、室町時代には番茶又はそれに類する茶が存在したと論ずる(中村羊一郎著吉川弘文館発行『番茶と日本人』p19-21)。さらに、伊藤うめの氏は茶種が縄文式晩期の真福寺(現岩槻市)の泥炭遺跡から発見されていることを根拠に、茶が大陸より伝来したものとしても「自然的な伝播によって埼玉県まで東漸するには可成の日数を要すると考えられ、西部の針葉樹林地帯では可成早くから存在していたことになる。又、短期間に埼玉県まで伝播したとすれば、人為的な運搬が考えられ、当時の日本列島で茶樹が栽培されていた可能性が強くなる。」(伊藤うめの「葉茶の飲用の歴史第一報 葉茶の飲用の起源について」(風俗:日本風俗史学会会誌 12(2)43)1974 p18-37 内当該記載はp19)とし、日本の茶樹が「三世紀前半に呉人によって江南又は台湾産茶樹が南九州にもたらされた植栽されたのが始まりである」(同p32)と論ずる。

ただ、伊藤氏によれば、右の三世紀前半に日本に入ってきた茶樹は中国三国時代の呉人がその勢力範囲のタイ、ビルマ方面の特殊発酵茶とともに伝えたものである。そして、同地で現在作られている特殊発酵茶は「ミアン」或いは「ニエン」といった「食べるお茶」である(中村羊一郎著吉川弘文館発行『番茶と日本人』p189-191、布目潮瀧著岩波現代文庫発行『中国喫茶文化史』p20)。さらに、守屋毅氏は「すくなくとも、今日たしかめられる範囲でいうかぎり、〈食べるお茶〉の歴史の中でそれは一貫して〈食べるお茶〉でありつづけた」(守屋毅著淡交社発行『喫茶の文明史』p43)と述べており、そこから推察するに、日本人がお茶を「飲むもの」と認知するには中国からの喫茶文化の流入を待たねばならなかったのではあるまいか。

ただ、茶樹が三世紀にビルマ、タイ方面の特殊発酵茶とともに黒潮に乗って入ってきたとすると、天平十一年(739年)八月十一日付の正倉院文書『寫經司解』の「茶廿束 直十四文」の「茶」が「ミアン」である可能性が出てくる。

タイの「ミアン」は小束で漬け込み、その形のまま出荷する(中村羊一郎著吉川弘文館発行『番茶と日本人』p189-191)。

恐らくは739年には「食べるお茶」と「飲むお茶」が混在していたのではあるまいか。

であれば、『寫經司解』の「茶廿束 直十四文」の「茶」は「ミアン」である可能性が出てくる。

また、日本の一部地域に残る石鎚黒茶等の存在(中村羊一郎著吉川弘文館発行『番茶と日本人』p42-48)等も右論を補強する。